

シンポジウム I ポストコロナ・ウィズコロナの病院経営

10月6日(木) 10:00～12:00 第1会場(旭川市民文化会館 1F 大ホール)

S1-4 広域・過疎・高齢化にICTとチーム医療で挑む

清水赤十字病院 院長

ふじき たかのり
藤城 貴教

当院は道東の十勝医療圏にある病床数91床（急性期38、地域包括ケア12、障がい者41）人工透析17床の非DPC病院で、西十勝の基幹病院としてCOVID-19パンデミックにおいて予防・診断・入院治療を担う。また2022年3月から夜間透析を開始し就労患者において勤務後の治療を可能とした。医師以外にも人的資源が少ない環境で、いかなる状況でも地域医療を守るためにはICTによる自動化、迅速化に加え全職種の働き方改革とチーム医療が重要と考える。

当院では事務作業の効率化を目的に、2018年より勤怠・スケジュール管理システムを導入、2020年には多職種連携情報共有システムを導入し、嘱託医を務める福祉施設の患者情報をリアルタイムに共有、施設回診もビデオコミュニケーションツールによる診療に対応している。これらは院内会議、家族の面会、COVID-19入院患者の回診および発熱外来の診察にも用いており、いわゆる三密の回避や感染予防に役立っている。続いて2021年にクラウド型電子カルテを導入して診療業務の効率化を進め、同年後半にオンライン文書決済・給与システムを導入しペーパーレス化を進めている。

このほか各部署の業務アセスメントと部署間の連携やタスクシェアリングを目的とした”FACT：Field Assessment and Coordination Team”を設置し組織横断的な業務連携を推進している。また2020年からは医師事務作業補助者を増員し、医師の業務管理をはじめ、文書作成業務代行など少ない医師が効率的に診療できる体制を強化し、特定行為に係る看護師を養成によるタスクシフティングも進めている。

人材不足を補い業務効率化を推進するためにICTを積極的に利用し、多職種に渡る働き方改革を進め医療過疎地における地域包括ケアシステムの確立を目指している。